

## 幕末の洋学事情

——近代の発信地、長崎と蘭医と近代教育——

杉本 つとむ

(1)

種蒔かれた近代教育——ここでいう近代教育とは形式的には一週七日を基準として、六日乃至五日の授業日を設定する時間割と、内容的にはヨーロッパの文教制度、具体的には蘭語から英語へ、また諸外国語の学習、物理、化学、数学など科学の学習教育などを意味する。また、種蒔いた人、教授者に蘭人をはじめ米、英、仏各外国人などの存在することも人的要素として考慮されるべきである。もちろん内面的には、ヨーロッパの人間主義、いわば精神文化の理解と認識である。以下、わたしの描く幕末の洋学のパラダイム（四頁の図参照）を実証することとする。

近代教育の特色は西洋学芸・文化の摂取——その是非功罪は今では問わない——が中心となっておこなわれたわけである。そのため、明治にはいって、学校や学制、さらに文部省の設置など、制度、機関の整備も大切な条件である。

広い意味で教育制度も欧米にならって整備されていった。江戸時代の教育機関などとは質量ともに大差のあるところである。内容的にも儒学（朱子学）が中心であった江戸時代とは比較にならぬ多種多様な新しい欧米の学芸を学び、教育されることとなったのである。江戸時代は、鎖国によって、日本的なものが十二分に熟成して、固有の文化・学芸が創造されたが、しかし世界的にみると、やはり欧米諸国に比して立ちおくれていることは歴然であった。その点、開国による幕末の約十余年は、むしろ近代へ移行すべき一つの過渡期として急ピッチで教育機関が設置され、内容の拡充がはかられたのである。ことに洋学の語で代表される欧米文化・学芸の撰取や翻訳の事業は、明治維新をさかのぼる約半世紀前でその第一歩をふみだしたといつてよい。これまで日本教育史の上で必ずしも十分に洋学の位置づけがおこなわれているとは思えない。

私見では文化八年（一八一二）の〈和蘭書籍和解御用〉（翻訳局）が近代教育の第一ページを開くものといふことができる。その中心人物は長崎蘭通詞、馬場佐十郎である。彼の属した天文方の責任者は高橋景保で、関西の天文暦学者の系統である。具体的には幕末まで洋学の英知を結集して着手した百科事典、『厚生新編』の翻訳がある。知の行動が近代の出発だ。これについては日本の翻訳史という視点で考察するところがあつたが、教育史的立場においても、まさしく近代への宣言を示すものといえる。例えば、『厚生新編』の訳編にあたり、巻頭に〈訳編初稿大意〉をかかげ、その一節に、〈此和蘭書の和解新たに敝命を下し給ふ御趣意〉はつぎのとおりであるとのべる。

行々弘く、天下に公けに布かせ給ひ、不学文盲なる野夫工職の輩に至るまで、遍くこれを読み能くこれを理會し、其用を利せしめんとなれば和解文法通俗平和を専らとすべし。但其事業によりて中等已上の人の取扱ふべきの事、殊に医法薬剤の如きはこれに論なし

右は俗に〈依ラシムベシ知ラシムベカラズ〉といわれる封建的な無識主義と異なる。明治元年に新政府が発表した

〈五箇条の御誓文〉の一節、〈官武一途庶民ニ至ルマテ、各志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス／智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スベシ〉といい、明治五年の学制發布とその際の〈被仰出書〉に、〈自今以後一般の人民華土族農工商及婦女子必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期した点などと共通する姿勢をみる。徳川三百年の人間主義は明治の高貴な純理的発言よりもむしろ、庶民生活に即した実学的、実用性をみることができよう。実質的に『厚生新編』は知識を広く世界に求め——〈皇基〉は別として——庶民が日常生活に活用できるように、西欧の精髓を提供せんとしたわけで、洋学の実学的、生活性は、明治以降の新政府が目ざしたところと、一致ないし共有するといつても過言ではあるまい。

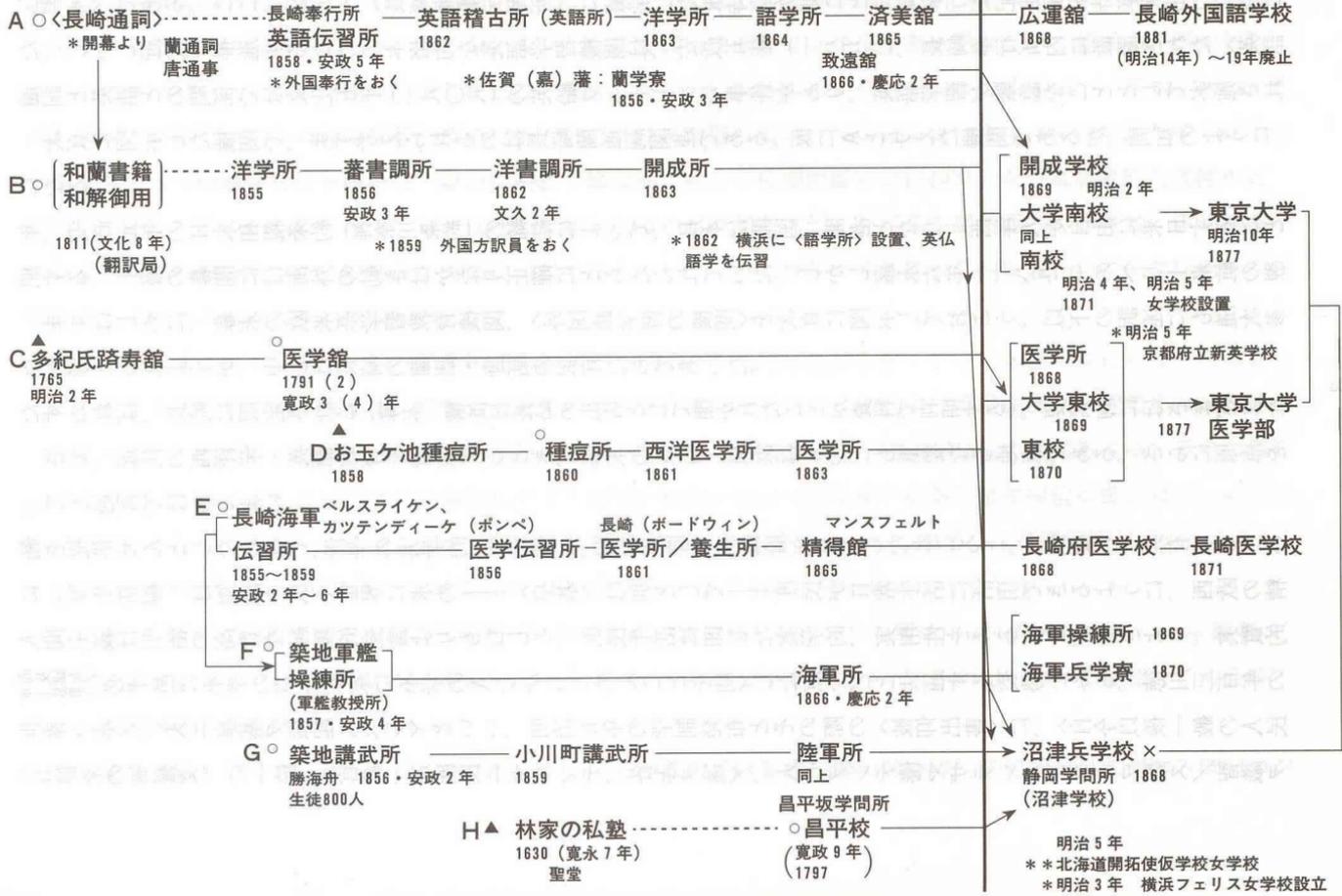
さて、近代の西洋学・英語教育を俯瞰するとき、幕末の長崎と横浜はもつとも重要な地点である。さらに原点をたずぬれば、長崎に限定される（幕末、横浜は長崎の outlet として開かれたことが資料で判明する）。要素的にはさまざまな点が考えられようが、中心は長崎の蘭語・唐話の訳官たちであった。

まずはじめに、幕末の欧米系学習教育機関、〈外国語学習の機関〉を次頁に図示しておこう。以下の記述にも随次参照する。上層の幕閣には海外の動きはかなり正確にとらえられていた。しかし嘉永六年（一八五三）のペリー来航の翌年、安政元年の日米和親条約（神奈川条約）の締結によって、日本は開国、開港となり、西洋人が自由に来日することになる。

次頁に図示した機関で、まず考えられるのは長崎蘭通詞関連である。仮にAと与えた機関であるが、周知のように、通詞と英語との関係では文化五年（一八〇八）の英船フェートン号事件があり、英語学習が緊急なこととして実施された。しかし近代を推進するための本格的な英語学習機関は、安政五年（一八五八）、長崎奉行所内に設置された〈英語伝習所〉である。ここは後述の〈長崎海軍伝習所〉に留学した永持享次郎こと長崎奉行支配組頭永持享次郎の官舎に

◆幕末～明治の外国語学習の機関 ▲私立を示す、○官立を示す

(明治元年)  
1868



設置された。主任ともいべき頭取は、蘭通詞の西吉十郎、楢林栄左衛門である。これが幕末の済美館まで進展していくわけである。ここで注目しておくべきは三点ある。一つは小著でのべたように、この安政五年以前に、すでに長崎蘭通詞たちは英語を学習していて、ペリー来航の際の通詞森山多吉郎や堀達之助の英語による通訳の場合を指摘しておかねばなるまい。したがって英語伝習所は単にプロ養成の機関ではなく、長崎人で広く英語を学習せんとする有志のために設置する意図のあったことである。すなわち、学習者は蘭通詞、唐通事、地役人の子弟に及んだ(古賀二郎『長崎の英語研究』を参照)。後年、明治にはいつての横浜の英語通辞や翻訳官の経歴を調べてみると、旧専門訳官以外に、(旧長崎県平民)の肩書をもつものが多いことが判明した。それも、ここに一因がある。英語伝習所は文久三年(一八六三)、何礼之助(礼之)、平井義十郎が学頭となっているが、兩人とも唐通事である。ほかに唐通事で英語学習に積極的だったものはすくなくない。第三は英語の外国人教師である。オランダ海軍将校、Jhr. H. O. ウィッヘルス Withers が一例であるが、これは上の図で E とした(長崎海軍伝習所) (所長、木村撰津守喜毅、万延元年訪米使節、咸臨丸の総責任者)の第二次オランダ海軍派遣隊の一員であるが、彼はカッティンディーケ『長崎海軍伝習所の日々』(以下『日々』と略称する。水田紀利訳、東洋文庫)に、(旗本出身の生徒全部が江戸に帰還)の後、(長崎奉行の懇望に従い、町の少年に英語を教えていた)とあって、オランダ派遣隊の人びとが単に伝習所——勝海舟、矢田堀景藏、榎本武揚(釜次郎)などが生徒であった——で軍艦の操練を教えただけではないのである。長崎での英語学習を考える場合、前頁で図示したように、海軍伝習所をはじめ、来崎の西洋人についても配慮して考えなければ片手落ちとなろう。

長崎海軍伝習所については後に詳述するとして、図の A の系列である(英語伝習所)は図示したごとく長崎の英語所、英語稽古所—洋学所—済美館—(広運館)と名称をかえ、場所をかえ、もちろん内容も充実させて展開していくわけである。そのスタッフの外国人もウィッヘルス以外、出島の商館員であった De・フォーゲル Vogel やイギリス人

L・フレッチャー Fletcher などで、後者は当時長崎に設置のイギリス領事館に勤務した二等助手であった。

さらに安政六年、アメリカの初代長崎領事の J・G・ウォルシュ (Walsh) Wilson が来崎し、約六年ほど住んでいたが、商會を設立して、貿易・外交・製紙業で活躍した。積極的に英語の教授として活躍しているわけではないが、これにも唐通事たちは英語を習ったという。これは公的なそれと別に、唐通事が会所で英語を学習し、きわめて優秀であったようである。

英語伝習所は最終的には済美館と改称 (慶応元年一八六五) されて、明治の広運館へと引継がれるが、明治初年の広運館の英語学習者は百十一人 (全体の約三分の一) とかなり多くの人数をかぞえている。広運館での講義内容は英・仏・魯語以外に、歴史・地理・数学・物理化学・天文・経済の諸学科を教授した。したがってやはり単に英語稽古所ではなく、近代的な外国語学校であり、欧米的学校の内容をそなえてきたわけである。済美館時代でも宣教師フルベッキ Vaterbeck が英語を教えるようになっていたが、フランス語はフランス人、B・プチジャン Petitjean という、パリ外国宣教会宣教師で、一八六三年 (文久三年) に来崎している。

やがて、スタッフとして学習者であった何礼之助、平井義十郎、柴田大助、横山又之丞、柳屋謙太郎、岡田好樹など十数名が立場をかえて英語を教授している。しかし本来長崎蘭通詞が担当のはずの英語は教える立場より、時勢の急激な変化のため、彼らが本来の通訳という仕事に忙殺されて、それに専念したわけである。いうまでもなく、蘭通詞の学究的態度は決して失なわれることのなかった一証拠は、嘉永四年 (一八五二) に『エゲレス語辞書和解』が編纂されて、幕府に献上されたことで証明される。これは文化十一年成立の『語厄利亜語林大成』の精神と功業を受けついでのもので、本木正栄らの英語学習と研鑽の伝統は脈々と流れていることも確かである。もつともこれは A・B の部、計七冊のみで中絶してしまったが、これら一連の蘭通詞の行動には、対外国との折衝・対応に多忙をきわめたために、

学究的な仕事にかかる時間的ゆとりがなかったことが因である。この訳編に参加の志筑辰一郎・名村五八郎・榎林栄七郎・中山兵馬・森山栄之助(多吉郎)・西吉兵衛など、いずれも通訳として多忙をきわめている。一八五九年(安政六年)来崎のアメリカ監督派教会の宣教師J・リギンスJigginsは長崎奉行の要請で長崎蘭通詞(幕府の通訳官)八名に英語を教えている。さらに、来崎のアメリカバプテスト派教会宣教師D・J・マクゴーワンMacgowanも同じく蘭通詞に英語を教えている(後述参照)。後者は石橋助十郎(政方)・三島惣太郎・榎林栄左衛門・名村五八郎・西富太・岩瀬弥四郎・北村元四郎・横河元之丞・三島惣太郎の九名という。このように、多忙な通訳も寸暇を惜しんで、よき教師あれば英語学習に努力精進していた。嘉永六年のペリー来航にあたり、ペリーとの通訳を担当したのは(当日勤務した首席通訳は森山栄之助であった)「ペリー提督日本遠編記」とみえる。あるいは、安政元年、開港された下田の奉行所に出役の長崎通詞は——通訳と文書翻訳に従事した——浦賀よりの(堀達之助、立石得十郎、名村五八郎)であり、長崎よりの(森山栄之助、志筑辰一郎、本木昌造、榎林量一郎、名村常之助、田中三四郎)などであった。公的にはいつも蘭通詞が英語の通訳の任にあたった。万延元年の遣米使節団に随行の通訳は立石得十郎、名村五八郎である。蘭通詞もしばしば実際の通訳に立合うことで、自ら英語力を身につけることもできたであろう。立石が倅(養子)、為八(斧次郎)を伴ったこともよく知られている。

なお、幕末(明治初年の英語通訳や訳官を具体的に調査してみると、先にもふれるところがあつたが、唐通事からの転向がすくなくない。この点、古賀十二郎氏が「長崎奉行所文書」によつて指摘するように奉行所からの申渡しに、(安政六年)唐通事鄭幹輔外六人、英語稽古、亜米利加蒸気船え罷越候儀……右船出帆致候に付、以来出島に罷在候亜人「アメリカ人」ワルシより同所並に於通事会所為致稽古候間。得貴意筋々(マツ)に可申達置候」とあつて唐通事たちの積極的な英語学習の様子がしられる。これはやがて、文久元年(一八六一)には崇福寺内に唐通事が自分たちで據金のう

え、その子弟のために「訳家学校」を設置、シナ語と英語の学習教授がおこなわれた。英語は「彭城大次郎、何礼之助、平井義十郎」などの唐通事が世話人となっている。このころともなれば、英語をマスターした唐通事もすくなくないのであろう。これもしかしやがて、公的機関などに吸収されたようである。すなわち、文久三年の「英語所」の学頭として、先の何礼之助、平井義十郎がみえるからである。唐通事の英語学習熱やその才能の豊かさについては、当時、英語を教授したアメリカ人の記録によっても明確である。

このように幕末の長崎での英語は、蘭通詞はもちろんであるが、むしろ時間的には余裕のあつた唐通事、さらに長崎の有志によつて日本中でもつとも豊かで積極的な英語学習がおこなわれたと評することができる（これは他のロシア語学習などでも同様である）。なお公的に英語通詞の職が長崎に設けられたのは万延元年（一八六〇）で蘭通詞堀達之助の長男、堀一郎、当時二十歳が「一代限英語稽古通詞」を命じられたことがはじめという。

いずれにせよ、長崎伝習所……済美館まで、長崎における英語学習は幕末における英語教育の一拠点として、きわめて大きな歴史的使命を果していったのである。加えてアメリカ人宣教師などの個人的英語教育などが有効性を発揮したわけである。すでに蘭通詞、堀達之助は江戸の開成所の教授によばれているが、やがて、何礼之助、柴田大助、柳屋謙太郎なども外国方御用として江戸出府を命じられ、長崎は手薄になるのである。慶応二年（一八六六）の開成所のメンバーとして、堀達之助の教授職、何礼之助の教授並とみえるとおりでである。なお蛇足ながら何は明治にはいつて爵位をもらつており、モンテスキューの『万法精理（法の精神）』（明治九年）などを翻訳している。

また新しい開港地、横浜には文久二年（一八六二）十月（文久元年八月とも）、神奈川運上所前官舎に、「英学所」（運上所英学院・ヨコハマアカデミーとも）と漢学所（修文館、文学所）が設置された。前者は当時奉行手付翻訳方の長崎蘭通詞、石橋助十郎（政方）、太田源三郎、宣教師 S・R・ブラウン Brownらが教師として、奉行支配の子弟に英語を教えた。

諸方洪庵の適塾で蘭学を修めた大鳥圭介は、中浜万次郎とともにこの英学所で英語を修得したという。これにはのちへボン、バラ、タムソンなど横浜在住の宣教師も参加している。別にJ・C・ヘボン Hepburn は幕府の依託生九名に神奈川成仏寺、のち居留地の診療所で、英語、幾何、化学などを教えた。学生には大村益次郎（村田蔵六）、林董、高橋是清など、明治維新で活躍する人材が含まれている。英学所はその後、文学所（設立は慶応元年あるいは文久元年とも、聖堂より講師を招請して在浜の諸役人の子弟に漢学を授けた）と合併して修文館といい、英語専門校として一般人の子弟の入学も許可した。ブラウンは明治三年（一八六六）に、幕府の小椋上野介らが横浜にフランス語伝習所を設立したが、前年に仏人アキス・ウートレが海岸通りに、フランス語講習所（俗に、弁天学校）を開設している。幕府は英語のみでなく、仏語にもかなり力を入れていたわけである。

## (2)

**開成所と私塾** 幕府は公的なそして中心的教育機関として、安政二年（一八五五）に、へ洋学所を設置する。これは、それまでのへ和蘭書籍和解御用（天文方所屬を独立させて、九段坂下に建設したものである。頭取に儒官、古賀謹一郎が指名された。この年同じく幕府がへ講武所を創設して西洋流砲術が訓練された。

洋学所は翌年、蕃書調所、文久二年（一八六二）に、洋書調所、翌年八月には（開成所）と改称した。洋学所は杉田成卿、箕作阮甫らが教授、原田政策ら二五名のスタッフという陣容であった。さらに蕃書調所にはほかに、川本幸民、杉田玄端、村上英俊、西周助、津田真一郎らが教授や手伝となっている。そして学則を欧米の学校にならって、教授科目に、語学では、蘭、英、仏、独、魯（露）の五か国語、さらにへ天文学、地理学、数学、物産学、化学、器械学、

画学、活学の諸科と、新に「数学局」を設置した。近代的教学の第一歩がプランニングされたわけである。また、安政六年に、蕃書調所とは別に外国方に訳員をおき、松木弘安（寺島宗則）、箕作秋坪、福沢諭吉らがこれに任命されている。文久二年の洋書調所には、さらに、箕作貞一郎らを英学助教、林正十郎らを仏学助教に指名、次第に蘭学が衰えていく。開成所の洋学者たち、加藤弘之、杉亨二や外国方の翻訳員、箕作秋坪、福沢諭吉らは直参に拔擢されている。科目は慶応元年には、さらに理学（物理学）、化学の二科が追加されている。最終は慶応四年（明治元年）で、この時は、柳河（川）春三、神田孝平が頭取になっている。

蕃書調所（開成所のスタッフはいずれも優秀な蘭学者が教授、教授手伝出仕として後進の指導にあたった。川本幸民、高島五郎、手塚律蔵、松木弘庵（安）、村田蔵六、木村軍太郎、市川齊宮など、その著名なものである。

そして文久二年（一八六二）洋書調所からのオランダ留学生派遣にあたっては、長崎海軍伝習所で操練をした「海軍班」が主ではあるが、それとともに、開成所の西周助（教授手伝並）と津田真一郎（同上）が同時に派遣されている。

幕府としては「長崎海軍伝習所」と一体のものと考えていたのである。さらに慶応元年（一八六五）には市川文吉をはじめ六名を遣魯伝習生としてロシアへ派遣、翌三年には、イギリス留学に、中村正直（敬宇）、外山正一（捨八）、菊池大麓ら同じく開成所のスタッフを配置するなど、積極的に海外の文化・学芸の摂取にもつとめている。これはいずれも開成所のスタッフである。通詞が選ばれないのは身分制度のうえで、当時としては仕方ないと思う。内にあつては、英文典や英吉利単語篇、英和対訳辞書の訳編刊行など、基礎的な点でも着実に英学への道を歩んでいく。長崎の蘭通詞や伝習所のスタッフなども人的交流のあることは、『英和対訳袖珍辞書』（文久二年・一八六二刊）の主任に大通詞、堀達之助をすえているなど、その一例である。他にも通詞から、開成所教授になつたものがあるわけである。この開成所のスタッフやここで教育を受けた人びとが、明治になつて一時は静岡へ移り、沼津学校などで教鞭をとる——西

周が初代校長である——が、いずれも、やがて南校→東京大学のスタッフとして活躍するわけである。学術方面では、そう短日月で優秀な人材を育成することは不可能である。新政府も文教関係では、田開成所のスタッフを人材登用することによって、新時代を建設せざるをえなかつたのである。これは、長崎の〈E 医学伝習所〉や江戸の〈D 医学所〉の医師たち——たとえば医学所三代目頭取、松本良順は江戸の医学所から長崎のE医学伝習所・養生所へ派遣されて医学修業をした。彼は戊辰戦争では官軍におわれ、捕えられて投獄されたが、明治になって東校のスタッフとして召還され、活躍する。明治維新を境にして、新政府は急に新しいスタッフで発足することは不可能だつた。その点、Bの根源を考えてみると、江戸の蘭学者とその塾での研鑽を逸することはできない。

〈洋学所〉→〈開成所〉に有力な人材を供給したのは遠く杉田玄白・前野蘭化・桂川甫周・大槻玄沢など、江戸蘭学とその塾での蘭学教育である。もつとも、これも玄白の著『蘭学事始』を参照すれば、〈蘭東セリ〉というように、淵源は長崎蘭通詞であり、具体的には旧長崎蘭通詞で、江戸へ職を求めてやってきた人びとである。旧通詞、石井庄助、西政(雅)九郎などであり、さらに、通詞、馬場佐十郎とその私塾、三新堂、その後の同じく通詞の吉雄呉洲などである。さらに玄白・蘭化の門弟から出た大槻玄沢とその門弟たち、宇田川玄随・玄真(風雲堂)とその門弟たち、さらに將軍侍臣、桂川甫周とその門弟たちである。幕府の翻訳局に務めた蘭学者もおおよそ、この学統によって占められたのである。ことに幕末においては宇田川玄真→坪井信道の線で養成された蘭学者たちによって蘭学、とりわけ語学、理化学の研鑽があり、その指導で洋学は発展したわけである。安政二年(一八五五)の洋学所設置の時点で、勝海舟が記録している〈江戸在住蘭学者〉は、〈杉田成卿、箕作阮甫、手塚律蔵、川本幸民、坪井信良〉など、計五十八名である。いずれも宇田川玄真を一流流とする(大槻玄沢の直系は天保期で断絶している)。洋学所は翌安政三年に蕃書調所となり、スタッフを充実させたが、ここの教授職となつたものは杉田成卿、箕作阮甫で、同じく教授手伝となつた川本幸

民、村田蔵六、木村軍太郎、市川斉宮など、やはりいずれも、宇田川、坪井の門で修業した蘭学者である。あるいは、文久二年（一八六二）、西洋医学所頭取となった緒方洪庵も宇田川玄真、坪井信道門で蘭学を修業し、長崎修業でさらに磨きをかけた蘭方医である。幕末における緒方の適塾は江戸とは別に独立した外国語学習所としても評価しなければならぬ。明治維新の多くの人材を世におくった点で松下村塾などの比ではない。医学、文教方面では抜群の功をなしたといえる。

こう考えてみると、江戸の私塾での約一世紀にわたる蘭学研鑽こそが、公的な洋学の基礎を固める大きな役割を演じたと評価してもよからう。私自身は文化八年の和蘭書籍和解御用の設立を蘭学の私学から国家学への転化と位置づけた。しかも開成所で学習したのは蘭学のみでなく英語、仏語、さらに魯語、独語などの学習で、これらが近代を支え、発展させる人的要素を形成したわけである。これにはそれまでの門流、学統とは離れて、広く諸藩の有志に開放された開成所の前進的方策や態度が大きく働いているわけである。長崎も江戸も志あれば、外国語を専攻する機会が与えられ、海外の知識をわがものとすることもできるようになった。さらに各藩内での藩主の開明性、藩校での洋学の採用や奨励によって、幕末の洋学人口もかなり大きな数字をもつようになった。いわば、杉田、大槻、宇田川、坪井、緒方などの門弟の門弟たちによって、全国的規模で洋学が普及していったといっても過言ではない。

### (3)

長崎海軍伝習所と医学伝習所 つぎに近代教育の形成のうへから、欠かすことのできない長崎海軍伝習所（上掲図E）について考えておきたい。この伝習所には矢田掘景蔵（鴻）、勝海舟、永持享次郎らがいるが、永持は先にあげたように、ここでの伝習の一つとして、英語伝習所の設置にも中心的に活躍する。日本の開国に重大な示唆と協力と豊かな

情報を与えたオランダが、日蘭約三百年の友好的関係を最終の美で飾ったともいふべき記念の館——これが伝習所である。長崎にはさらに幕末にアメリカの宣教師らの来崎があるわけで、これらが、日本の知識人に、先進技術にとどまらず、ヨーロッパの精神文化を受けとめるのに、大いなる効力を發揮したことは従来ほとんど取りあげられていない。残念なことである。小論には割愛したが、知識人は即、洋学学習者ではなく、儒学の教養をもつ人たちの存在も逸してはならない。以下に考察するとおり、蘭医来日はきわめて大なる影響を日本に与えたのである。近代日本を根底から構築するファクターになったといふことができる。これは長崎の洋学所、江戸の蕃書調所などもふかかわりをもつ、さらに、長崎の医学伝習所は江戸の西洋医学所に対しても、その近代化という点で決定的かつ指導的影響を与えたといつても過言ではない。幕末日本の教育を考へるうえで、まことに重要な機関といふことができる。

オランダの教育班は第一次、第二次と二度に分けて来日しているが、第一次はペレス・ライケン Pels Rijcken はか、士官、機関方、水夫、火夫など、総勢二十二名である。第二次は、R・H・ファン・カッティンディーケ Kattendycke であるが、これについては前者と異なつて多くの資料があり、活動の詳細をすることができ、第二次の教育班に軍医、ポンペの加わつてゐることはこれまたみのがすことのできぬところである。日本側の伝習生としては、第一回伝習生——安政二年（一八五五）秋の派遣——には、長崎在勤目付、永井尚志が指揮をとり、矢田堀景蔵、勝麟太郎、中島三郎助（浦賀奉行所与力）、小野友五郎らがあり、諸藩から送りこまれた伝習生もいて、総勢四十余名である。この第一回伝習生の中には佐野栄寿左衛門（常民）、中牟田倉之助（肥前藩）、佐藤尚中（佐藤泰然の息子）、五代才助（友厚）、川村与十郎（純義）がいる。第二回伝習生は安政三年で十一名中に榎本釜次郎（武揚）がいる。また第三回生は安政四年で、二十六名、この指導はカッティンディーケであるが、ここには、のち和蘭留学の、内田恒次郎、赤松大三郎、沢太郎左衛門など俊秀がふくまれている。彼等がどのような伝習課業によつたか、第二回生のものが『海軍歴史』（卷

之五、海軍伝習下)で判明するので、参考までにつきにあげておく。

○伝習之科目時間

自九時 自十時半 自二時 自三時  
迄十時半 迄十二時 迄三時 迄四時

日曜日

休

月曜日

船中帆前 運兵訓練  
船具 運兵訓練  
砲術築城 運兵訓練  
白鹿屯訓練 ミニユーへ手銃手前

火曜日

航海 点竄(代数学) 砲術築城 造船  
騎馬訓練 運用 算術 蘭語  
船具

水曜日

船中帆前 蘭語 騎馬訓練 騎馬訓練  
算術 造船 船具 運用  
築城砲術 航海 点竄  
抜隊電 散兵

木曜日

船中大砲 点竄 造船 砲術築城  
航海 蘭語 船具 運用  
算術 下等士官心得

	船中帆前	蒸気	騎馬調練	騎馬調練
金曜日	蒸気	地理	地理	地理
	船具	航海	点竄	
	白鹿屯調練	リニ一学		
土曜日	蒸気	船掃除		
	歩兵調練			
	騎兵調練	騎兵調練		

稲佐郷ニテ

右のように、それまでの日本人の生活単位と異なつて一週七日というオランダ時間であり、実用的操練術もさることながら、単なる軍事訓練ではなく、ヨーロッパの科学教育を学習したのである。

第一次の責任者、P・ライケンは、勝海舟宛安政四年二月廿八日(五日)付手紙(『勝海舟全集別巻』、〈蛟鳴余言〉)に収録)で、へ日本人至極優美にして勝れて好學なるを知る事久し……其叮嚀聊妄ならず、優美にして精撰なり。且我等を敬愛す、諸學術多端ありて是を教示する時、通詞の助を受けるに学端の言意通弁なり難きことあれども、伝習方数多の人々宜配慮ありて倦むことなく勉強あるをしれり……我慮るに、若今日本、外国民と寛優の交接をなすことあらば、其學術、西洋の国民と同等の場に至らんは必然なり。勿論彼に勝ること易らん……我悦しきは、日本の人々数輩、和蘭国に渡海あらんと由。実に西洋を見れば日本改革必要の事にして、西洋の事情の弁知は口授に因てせんより功ありと覚ゆ。是其安泰強勢を進るの功最速にて最上の方便とすとのべる。ライケンがいかに日本伝習生を高く評価し、日本人がいかに熱心にかつ積極的に指導を受け入れて学習したことか。この時点で和蘭留学の計画も明確だったので

ある。海舟についても、へ學術に於て君の勉強、君の怜悧は能知れり。君の蘭學と又彼任を受たまふべきは顯然なりんと評価されている。海舟もこの時に和蘭人から大きな影響を受けたことと思う。勝海舟自身ののべるところを一見してみる。へ安政三年一月十日日付、竹川竹齋宛のへ麟太郎君の手紙にこうのべる。

此地（長崎）は日々伝習、元日一日を相休候位、甚多忙、学科七科、一日二科宛相學候事故、随分困却仕候。此節は少々目鼻も開かり申候。蒸氣之事も余程分り申候。中々我邦などにて唯今之処にては出来いたし候者とは不レ存機関目耳を驚し申候。山師輩彼是造製を申候は、実に笑に堪たる事に御座候。

○小子義學候処、航海之術、算學數理に明ならずしては被レ得レ不レ申、御存之通小子無算故、大に困却、此節少々々々得いたし候哉と存位、大に精心を費し申候。其他は書籍之助にて可成相弁申候。

右のように海舟必死の伝習ふりが判明する。海舟はのちの大隈重信などちがって、数学には弱かったようである。同じく竹齋宛の安政四年四月二七日付手紙の一部につきのようである。

当地に居候へば、学び候而已、人に教へ候事は少なく、学間益進可レ申、また、万一留學之説被レ行候折も、甚都合宜敷場合も有レ之、先々当教授方蘭人滞在中は、居殘候積に御座候。乍レ去、江府より何と申參候哉、不分明之事にて候。

○伝習之諸術、浅きにて深く遠し。彼邦、數百年実地と學術にて經驗精微を極候を、纔之歲月を以て可レ得と存ても、中々左は參り間敷敷、研究年を積候はぬうちには、到れりとは申難く候。一通は、氣運之しからしむる処、吾人輩、得たるがごとしといへども、深く省れば、不レ及遠しと存候。我説被レ行、歐羅巴留學之事一挙せば、數年之後、出藍之者多からむ。

右のように、學習学科の困難さもさることながら、オランダが長年かかつてつくりあげた技術・學術の精緻さをこ

く短日月でマスターしようというのは困難だという点も自覚し発言している。へ深く省れば、不及遠しは確かに実感であろう。海舟には伝習生のヨーロッパ留学の腹案もあったことが推測されよう。

### 勝海舟と蘭学修業

右で、「欧羅巴留学之事一挙せば……」とあるのは、師、佐久間象山宛安政三年十二月二十日付の手紙にも、「留学之事も多分相極候様風聞は御座候得共、例之因循風にて一日々々と相遅れ、終に機会を失し候事に御座候」となげき、「之はめずらしからざる事にて、毎事右之如く、勞して功なきに到り可申と、甚心配仕候」とのべる。ここには幕府のいつにかわからぬ消極的行動をそれとなく批判しているわけである。海舟の希望はやがて、文久二年（一八六二）に、榎本釜次郎（武揚）や西周助（周）らが和蘭留学生として派遣されることで実現するのである。しかし、年齢も四〇歳に近かった海舟より若い人たちであった。このように海舟の留学は思いどおり実現しなかつたが、のち、慶応三年八月一七日、かつて伝習所の同僚であった佐藤与之助宛に、「悴小鹿事も、六月廿五日之飛脚船にて米国へ差遣申候」と息子の留学を報じて、希望の一端は達成されている。時に海舟四五歳、軍艦奉行である。これには米宣教師、フルベッキがふかくかかわる。もし、海舟が安政二、三年ごろ留学していたら……と考えるのも痛快であろう。

また、佐久間象山宛安政三年五月六日付手紙には、長崎海軍伝習所の講義の具体的内容をつぎのように報じている。やや長文ながら引用しておく。

「伝習之學術も兎角存候程果行不<sub>レ</sub>申、右故、未だ帰府之処も<sub>レ</sub>睨<sub>レ</sub>と相知不<sub>レ</sub>申候得共、一と渡りは見通も相附候上は実地之処研究いたし候様相成候は、簡成航海も相出来可<sub>レ</sub>申哉。何分蘭書読候者少く候間、誤伝多く、これには困り申候。学科之内にても、数学は天文方之者兩人スチュールキュント〔Steiner〕<sub>〔航法〕</sub> 丈け之処は会得仕候。元來彼の算

と申者も極之処我との差別格別に違ひ候ものにも無<sup>レ</sup>之事故、算学出来候者は会得早く参り申候義に御座候。小子輩無算之者は、算より入候にて甚困難に御座候。此節大方は覚申候。何分困難致し候程面目無<sup>レ</sup>之事に御座候。詳證術之御説難<sup>レ</sup>有、一々御尤至極と奉<sup>レ</sup>存候。

教頭へ此節は築城之事承り申候。兎角能き書籍無<sup>レ</sup>御座一候由にて、はきといたし候事も無<sup>レ</sup>之、乍<sup>レ</sup>去、随分新聞も御座候事に候。ソムメル〔百科全書〕の編者の事承り申候ひしが、別段これぞと申ものも心得不<sup>レ</sup>申赴に御座候。同人はシケーナチュール〔schickkünde、naturkunde〕の学は左のみ得意の様子には無<sup>レ</sup>之、此二学は在留之外科ハン、テル、ブルックと申者博覧に御座候。少々承り度と存候へども、他の學術に相追れ暇無<sup>レ</sup>之、其上随意に出会と申訳にも参難き意味合にて、困り申候。これ等はいまだ頑成る事多、一時にゆるまりと申といふ場合に到り難く、また其上蘭人共之うちにも嫌疑甚敷有<sup>レ</sup>之、中には可<sup>レ</sup>笑事共多く、彼邦学校に向き入塾等いたし候様成り不<sup>レ</sup>申候ては何事も早くひらけ候事には参り難く哉と、此節に到り歎息之事共多く御座候。

過日も蘭書之事被<sup>二</sup>仰下、一畏り候。書物は兎角扨底、私など此地にて拝借いたし居候分なども、此節にいたり江戸へ御取戻し相成、困り申候。蘭人共も書をかし候は兎角嫌ひ申候。其上格別之ものも所持不<sup>レ</sup>致、書には甚差支居申候。当秋の入津を相待居申候。此時に至り候は、少は被<sup>レ</sup>得可<sup>レ</sup>申、其節迄御待可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候。必らず心掛、何ぞ取入差出可<sup>レ</sup>申。御注文之書は如何哉。沢山齋もたし候とは申候へ共、多く江戸へ御引上に相成可<sup>レ</sup>申事哉と相考居候。

土地に残り居候もの無益之書而已。諸侯達、訳官、町年寄杯に出入之者有<sup>レ</sup>之候故、右へ手を入れ置、宜敷ものはいづ方へか失ひ申候。稀に右をもれ候ものは高価、江戸之二、三倍に至り申候。

鉄の扱ひ普通に開け不<sup>レ</sup>申候てはと申御説、御尤之御義、既に昨年ホークラーヘン〔stookoven 溶鉱炉〕取寄不<sup>レ</sup>申候ては叶ひ難き事といふ説被<sup>レ</sup>行、御詔に相成申候。当秋は多分参り不<sup>レ</sup>申候。御説之フレットモーレン〔Krummolen 碾き割り機〕も、

非山へ相廻り□行違一見不レ仕、残念之事に御座候。是も数御取寄に相成候様いたし度と頼申出置候。

レグレメントエキセルシチー〔教範規定〕之ニウ〔dieu〕なるもの、蘭人は持居候哉、一向見せ不レ申、大

方は是迄之書にて教へ候。其内マリネ〔marine〕之エキセルシチー〔exercice〕之書有レ之、右之内ニ二条抄録差上申候。

陸にては矢張パトリーヘフーチー〔Patrouille patroolie〕を結付置申候事と申聞候。しかしながら、多分此節はマリネ一

同に相成居可レ申と蘭人共は申居候。フートマート〔voormart〕は、三步二越爾〔えゑ〕と申候得共、少々狭き方に御座候。一

分時一〇六歩、七十六歩のものは喪礼之節ならでは用不レ申と云。

今日之便は急便にて俄に出候事故、とりあへず申上候。余は又々可ニ申上、随分時候御厭専一奉レ願候。

以上。

五月六日

麟太郎

象山先生 榻下とうか

猶々、バロメートル〔baro〕之類は、甚扨底に御座候。これも、秋之入津には参り可レ申候。既に御船付一つにて

かけ替一無レ之、テルモメートル〔thermomètre〕は随分□渡御座候由故、心掛取出し可レ申候。オロ、ヂーフエール

〔horloger〕、幸一条と、のへ置候もの御座候間、呈し申候。御用達候は、大慶奉レ存候。

デッケル〔名〕を弁駁いたし候書、蘭人存居不レ申、私此節読居候ケレイクスキウンデ〔atmosphère〕、ミウルケン之

著、八百四十五年之板なるもの、蘭人もよろしき赴申居候。〔底本が以下裂けて〕

\* 講談社版『勝海舟全集』による。

右の手紙は前半と後半に分かれるが、へ伝習之學術も免角存候程果行不レ申とあるように、先に引用の手紙同様、

伝習の授業にはかなり苦心したことが判明する。へ蘭書読候者少く候間とオランダ語への未熟さも率直に認めている。

海舟は理数系には相対的ながらあまり強くなかったようである（反面、オランダ語は江戸で学習した場合と異なり、かなり進歩したという）。象山が「ハシケン詳證術」を示しているのであるが、これは、安政二年八月二十日付の象山への返書中に、ウキスキュンデヘウキスキュンデ御電覽之趣、御示教一々の当、後学に相成候義深く感佩仕候」とある点と照応する。Wiskundeは英語の mathematics 数学であるが、諸橋轍次の『漢和大辞典』にもみえないものの、高野長英の書齋号「ハシケン詳證館」もあり、数学のことと思われる。またヘシケンナチュールは二つの学科——シケンデ化学とナチュール化学とナチュールフィロゾヒー物理学のことを一つにのべたものであろう——が、登場する。ハン・テル・ブルックは来崎の蘭医、モウニッケと代った蘭館医師、Jan Korl van den Broekブルックであらう。

ブルックは嘉永六年（一八五三）八月に來日、第一次の長崎海軍伝習開始とともに、医師として依嘱されたわけである。海舟が安政三年（一八五六）に記述した『蚊鳴余言（文明予言のもじり？）』に、ブルックについてつぎのようにべている。

当<sup>マ</sup>時在館の医、名をハンテルブルックと云。分析術（スケキユンデ化学）及び兵学ヘイガクに長じたり。其人肥満、赤顔、甚慷慨の氣象あり。常に我が官府の士を見る時は、好んで我邦の非を拳示し、久しからず外国の有とならん杯といふ。平日訳司に對し云、我日本に在留して屢恩恵を蒙むる、故に官府の士を見る毎に、其短をいひてこれを知しむ、これ聊国恩に報ずるの一端なり、といひて笑ふと云

ブルックは長崎奉行の依頼で通詞、町医師などをはじめ多くの日本人に理化学を教授した。また、たとえば、薩摩、肥後、肥前、水戸、筑前、筑後などの諸藩士に新しい造船、製鉄、電信、ガス灯などの原理、作製などについても教授した。門弟の一人、河野楨造（福岡藩々医）の『舍密便覧』（安政三年）がしられている。日本最初の定性分析化学書という。ブルックは諸記録を総合すると、いささか氣象のはげしい人物だったようである。

後半では長崎での蘭書払底のこと——象山が洋書を求めるのに熱心だったようである——が、きわめてリアルに記述されている。半面、海舟の蘭学の進歩を知る好材料となっている。いうまでもなく、熱心な伝習のさまはただ海舟のみでなく、伝習生のすべてに共通するところと解すべきであろう。

蘭医と近代的教育 第一次につぐ、第二次の海軍伝習には、指導者としてカッティンディーケを得、総数三七名の編成になる教育班が来日した。カッティンディーケの著述した『長崎海軍伝習所の日々』が有力な資料となる。この書で、日本士官の多くは我々と訣れるにあたり皆涙を目に湛えていた。(中略)彼等はその社会的階級よりして見るに、政治上権勢を振るうべく運命づけられた人々であるから、彼等が我々の業績を多としていることは、必ずや日蘭関係の上に良好なる影響を及ぼすに相違ない」と記す。事実、伝習生であった木村も勝も江戸にもどって、幕府の中樞で活躍する人物である。また、長崎地方における有力者には、随分自由主義を謳歌している者が多い」とも記すのは注目を要する。長崎には、徳川三百年の治下、ヨーロッパの精神風土がじよじよに醸成され根づいているのである。いうまでもなく、伝習生は英語ではなく、オランダ語を学習し、オランダ語で講義されたが、他に「数学・物理学・化学・解剖学・歴史・地理」なども学習している。いうならばヨーロッパの近代教育の一端をも学んだといえるのである。しかし基本は語学で、ヘオランダ語では、かなり大きい進歩を示した。……どの伝習生もよく読むことが出来た日本人伝習生はまた、歴史学と同様地理学に対しても非常な熱心さを示した(同上書)など、伝習生の進歩は著しかったのである。ここには幕府以外に、へ肥前、薩摩、筑前、長門)などからの藩士も伝習生として参加し、へいずれも優れた理解力とまた困難を克服しようとする不屈の熱意の点で傑出しており、彼等はそれによって何事も物事を根本から究めようと取り組んでいた(シャイス『日本開国のためのオランダの努力』)と評価されている。そしてこの藩士た

ちは、幕府の伝習生が江戸に引揚げた後も、上のウィツヘルズにより、航海術と英語の授業をさすけられていたとみえる(同上書)。そして「日本人は二、三の欧米諸国民と同様にしつかりした民主主義精神を吹き込まれた」とみえる。要するに伝習生の教育はいわば近代的な科学認識と民主主義を日本人に注入したわけである。この点はさらに随行した軍医、J・L・Cポンペ、Pompe van Meerdervoertの場合、すなわち、海軍伝習所と別に「医学伝習所・養生所」での活躍で証明される。

ポンペは一八五七年(安政四年)長崎に来、五九年に派遣隊が帰国後も六二年(文久二年)まで五年間長崎に滞在し、医学を中心とする諸科学の教育に従事した。幕府の医学伝習生は十四名(十二名)であったが、いうまでもなく諸藩の有志も参加している。彼は回想録『日本における五年間』を記述しているが、その一部でつぎのようにのべる。

オランダは真実その派遣隊によって、日本を助けようと希望していること、日本を、教育と発展によって、より良い立場に迄導くことを希望していることを示した。……約二百人の日本青少年、それも殆んど大部分は立派な身分の出である青少年がそこで教育を受けた。彼等はきわめて賞讃に値する方法で、出来る限り多くのことを学ぼうと熱心に努力し、その教育の結果はきわめて良好であった。

この学校の最大の利益は、私の考えでは、若い生徒たちがそこで受けた航海訓練それ自体にあるのではなく、むしろオランダ士官との五箇年間の交際の結果として、これらの日本人が(人間的に)全く改造せられたという点にあると思う……この若人たちは、いわば全く欧風化せられ、また全く急速に日本の進歩派の中核を形成するようになった。彼等は教育終了ののち、江戸やそれぞれの諸藩に帰ると、その新しい思想を政府はもちろん親戚、知友に伝えた。それは、彼等がいずれも相当の地位にあつたために、それがすべての人に深く考えさせる結果となつたからである。

右を一読するならば、ポンペをはじめとする立派なオランダ人指導者——第一次のオランダ教育班の長、ライケン  
は帰国後、海軍大臣、国王ヴィルヘルム三世の侍従武官となった。また、カッティンディーケも帰国後、海軍大臣外務  
大臣となつてゐる。いずれも、逸材であつた——が日本人に与えた近代的教育、人間形成の根本にかかわる教育は見  
事というほかない。彼らの残していったいわば精神的遺産はいくら高く評価してもしすぎないと思う。被教授者たち  
はいずれも社会的な地位が高く、リーダー的存在の人物（特に第二次の伝習生）だつたことは、当時及び幕末（明治の  
日本、近代の日本に与えた影響はかなり大であることが想像できるのである。へ長崎伝習所・医学伝習所・養生所）は  
単なる伝習所ではなく、近代教育の場であつたとわたしが主張するのもこの点にある。

のち文久二年、近代的軍艦——すなわち遠洋航海にたえる船——建造の案に発して和蘭へ留学生を派遣するが、そ  
の中に、〈海軍班〉とともに、〈職方〉（それまでの職人と区別し、技術者としてこの語を採択した）として、職人たちの参  
加している点もみのがせない。へ鑄物師、時計師、船大工、鍛冶師、宮大工など総名六人がふくまれている。技術修  
得のため、伝習生の中にはいつて、操練など具体的技術、扱い方を受持つた人々である。彼らの技術をさらに磨きた  
め留学に参加させたと思うが、鑄物師、中島兼吉はのち士分となり、明治維新後、大阪砲兵工廠の技師、東京工廠技  
師として活躍した。また船大工、上田寅吉は、ロシア船ディアナ号が難破のため、戸田村で洋式ロシア船建造の際、  
これに従事したいわば洋式船大工の一人であつた。上田も明治維新後、工部省製鉄所に出仕し、海軍一等技師として  
活躍する。時計師、大野弥三郎は、明治維新後、大阪造幣局に出仕、大蔵三等技師として活躍、さらに古川庄八は同  
じく明治維新後、海軍に入り、横須賀造船廠造船科主幹として活躍、いずれも、先進技術の修得と後進の指導で生涯  
をおえた。こうした人々こそ近代のヨーロッパ工業・産業の先駆的担手として重要な人的資源であつた。

ポンペはまた、幕府と別に、参加ないし関係をもつた藩や特定の人物の進歩性を記録している。長崎奉行、佐賀藩

などからも特に要請があつて、受講生を送り込んだ例もあるが、ヘオランダ士官たちが大名たちから深く尊敬されたことは、彼等がしばしば多くの大名たちから訪問をうけた事実に徴して明白である。これらの大名たちは、長崎に来て、われわれと一緒に長い時間を過したこともあり、またわれわれを招いて食卓を共ににしたこともあるといふ（先にあげたように長崎英語伝習所ではオランダ人が教える例もある）。これまで国立の獄屋といわれた出島の住人、オランダ人も、自由に外へ出、日本人と接することがはじめて実現したわけで、やはり開国は真に日蘭関係にすばらしい近代の第一頁を与えたのである。時間的には明治維新前、十余年ほどにすぎないが、それだけにまた強烈なインパクトをもつて、日本人に近代が与えられたといえよう。長崎はこの時点で文字どおり国際都市の第一歩をふみ出したのである。ポンペはまた、指導者のうちのヘオランダ海軍の技術士官H・ハルデスHaldes氏のことを特に紹介している。ハルデスが、三年の間に沼沢地を変じて蒸気機関工場と機械工業の工場と化したとその功績を高く評価紹介している。そしてさらにハルデスが、へ一群の技術家を養成したとのべ、日本の近代工業の発信地がオランダ人の手により、長崎に構築されたことを証言する。是に先にあげた職方たちの精進もつけ加えるべきであろう。そして、ポンペはヘオランダ海軍派遣隊は日本帝国の発展の上に多大の影響をおよぼしたということをも更に証明する必要があるまじと断言しているのである。

安政六年（一八五九）に閉鎖された海軍伝習の伝統は、安政四年江戸の築地、講武所内に開設の軍艦教授所（のち、操練所）へと引つがれる。ハルデスの場合も日本人に多大の影響を及ぼしたうちの一例にすぎまい。このへ長崎海軍伝習所へで養成された幕府関係者は、やがてへ築地軍艦操練所へやへ築地講武所への責任者として活躍するわけである。万延元年の日米修交条約締結のため、訪米する使節を運んだのも勝海舟をはじめ、長崎海軍伝習所で操練を学んだ人たちによつたわけである。また、文久二年の和蘭留学生として選抜された内田恒次郎（旗本）、榎本釜次郎（御家人）を

はじめ、沢太郎左衛門(同上)、赤松大三郎(同上)、田口俊平(久世家々臣)などいずれもこの伝習生であり、長崎養生所でポンペの下で研鑽した江戸、医学所のスタッフ林研海、伊東玄伯(方成)などがこれに加わった。これに江戸の洋学調所教授手伝並の西周助(津和野藩士)と津田真一郎(津山藩士)が加わって、人文科学・社会科学の分野を学習したのである。

『幕末和蘭留学関係史料集成』(日蘭学会編)の編者、大久保利謙氏が、和蘭留学について、へ結果においてとはいえず、当時の洋学の全領域にわたり、しかも近代的国防科学から近代的政治経済の学へと多角的総合的に近代国家の建設を目ざすという前向きの実践性をもち……留学生がそれぞれの分野で帰国後に発揮したすぐれた業績が何よりこれをよく立証している」と評価するところであろう。そしてわたしは強調したいのだが、やはり基本的には長崎海軍伝習所・医学伝習所での修練が原動力となつたのである。同時に伝習所が技術教育の授業で終つたのではない点を銘記しておくべきであろう。その一代表として、勝海舟をとりあげてみようか。長崎伝習所にいたとき、賛美歌「ローフ・テン・ヘール」たたえよ、神をを通詞に直訳してもらい、へ何すとしてやつれし君ぞ(思ひやつれし君は誤伝)と誤訳のまま意識している。訳はともあれ、サンピカを訳したこと自体、きわめて象徴的なことであろう。よくいわれるように、江戸の無血開城の大役を果たした大人物は、ここで心身ともに大きく養なわれたといえるであろう(この機会に、海舟は薩摩藩を訪問している)。私見では、海舟の蘭学学習の時期など異論のあるところであるが、おそらく、江戸での蘭語学習などより、長崎での伝習所時代、オランダ人から直接オランダ語とオランダ学芸、ヨーロッパ文化を学んで、世界観、思想など近代的なものを実体験して変つたと思われる。長崎では知識と体験(当時すくなくとも、英・仏・魯・蘭の外国籍の人々がいて、直接接触しており、かつ日本各地、のち新政府の中核となつた薩・長・土・肥の各藩からの人材とも接觸している)によって、それ以前より二まわりも二まわりも大きな人物に成長したと思う。さらに、咸臨丸による訪米で

体験したこと——間接的ながら大隈重信にもある——も貴重な点であろう。しかしこれはいわば、長崎で得たものの確認にすぎないと思う。

さて、海舟の幕末、明治維新にみられる言動を一見すると、彼が国際的である前には、まず国内的に土農工商への平等観が先行し、それが長崎というところで、国際的なものまで拡充展開していったと考えるべきであろう。彼がいわゆる洋行帰りにおうおうみられる軽兆浮薄な言動の人物に走らず、いわば、幕府に対しても新政府に対しても、よくバランスのとれた政治的言動をとることのできた点、海舟にまさる人物は幕閣に誰を求められたであろうか。わが田に水を引く結論になりかねないが、そうした大人物になるために、海舟が吸収したものは蘭学であり、外国語であり、長崎という近代の発信地、そこに数年をすごしたということである。この点、わたしは長崎の到遠館などで教育された大隈重信なども共通する近代への原体験が存在することを認めたい。そしてあえて蛇足を加えれば、海舟と行動をともにした小海舟たちが、長崎の伝習所や長崎の人々の間に数多く養成されたと思う。

**蘭医と日本の近代医学** ポンペは医師であるから、はやくから近代病的病院の設置や医師の養成をすべしと考えていて、その点では幕府の要請とも考えは一致していた。つぎに、ポンペの医学に関係するところも一見しておこう。

江戸から出島に数名の学生が派遣されたが、その内には、將軍の侍医の子息松本良順が含まれており、この医学教育の監督の任務は学生たちの秩序および規律に関する限りでは、この良順の手に委ねられていたのである。私は良順をよく知り、また彼がきわめて健全な理解力を有し、人並はずれた才能を有することを発見した。

右の「江戸から」とは、いうまでもなく幕府の「種痘所」——先に図示したように、D私立へお玉ヶ池種痘所」に発し、万延元年（一八六〇）に官立に移管された——の医師をさす。彼らはポンペの指導を得、やがて江戸へもどると

いう図式である。しかもポンペの語るところでは、江戸からのみではなく、実際は、へ越前、武蔵、伊勢、筑前、摂津、薩摩、備前、豊前、肥後、佐渡と諸藩からも学生が派遣された。わたしの調べた限り、松本良順以外、佐藤尚中(佐倉の順天堂を設けた佐藤泰然の養子)、緒方維準(緒方洪庵の次男)、長与専斎(緒方洪庵の門人、父は大村藩医、やがて精得館の長となる。へ衛生の語を創訳)、司馬凌海(佐渡出身、通訳として良順に従う。ドイツ語を専攻)など、後に著名となった医師の参加もする。ここでも近代医学の発信地が長崎に存在することが証明されよう。さらに、長崎在住の医師たちもポンペの講義の席に出席したのである。いずれも通詞が仲介者として通訳したのであるが、ポンペはへ通詞にも学生にも全く新しい未知の事柄であったから……彼等は派遣隊(海軍伝習所のオランダ人)に加えられていた乗組みの教師からオランダ語の教授を受けた……また私の方でも出来る限り早く日本語を学ぶことに一生懸命努力した」と記している。日本派遣のオランダ人は、いわば総掛りで日本に新しい教育を施したことになる。このようにして、日本人のオランダ語の学習とその総仕上げ、西洋近代医学への知識、理解の総学習と修得など、進展増進がめざましかったわけである。ポンペは一八五九年(安政六年)九月九日、へ私は四十五名の医師と一人の女医(シーボルトの娘、伊称)の面前で第一回目の屍体解剖を行った」と記す。

ポンペの提案により、やがて、養生所(病院)が医学所の付属的な建物として設立される。文久元年(一八六一)の完成であるが、(1)病室(八室・一室にベット十五機)、(2)隔離患者室・手術室(安政五年、文久三年長崎にコレラが発生している)、(3)薬品・機械・書籍など備品室、(4)調理室(患者のための洋食調理)、(5)浴室、(6)運動場(患者のリハビリ、散歩用)——を設備した。純西洋風病院であり、屋上には日本の国旗(日章旗)とオランダ国旗がひるがえることとなった。さらに長崎奉行が市中に発した訓令を一読すると、病氣療養の下々のものが、医師の見廻りや舶来の薬などに品不足で、療治も行届かず死去するものが多いので、へ長崎市郷のもの・旅人」などでも、療養を願うものは役人も規則によ

つて、診療治療が受けられるように配慮し、極貧のものには無料で施薬するようにとうたつてゐる。ここでは文久二年二月十五日(三月十五日)から幕府の許可により、公的に毎週一回種痘が公開された。ポンペは公娼制度廃止や検梅制度も提案している(幕府は拒否)。

さらに、ポンペは、私の任務を退くに当つて、私は私の教育を受けたすべての人々に対して証書を与えたとして、こう三種の証明書を与えた由を記す。すなわち、(一)、學術優秀にして賞賛に値し、実地においても十分な程度に技倆熟達である。(二)、技倆十分にして必要な援助に当ることができ。(三)、講義には出席したが、成果は十分ではない。自身で病人の治療をなす能力がまだ十分ではないのである。内訳は六十一人中、第一番目が二十二名、第二番目が十六名、第三番目が二十三名であつた。そして、第一番目の優秀な人々のうち、(一)江戸における医科大学(医学所)の教師に任命された人がたくさんいる。松本良順(順)氏は江戸に帰ると將軍の一番侍医に進められ、同時に陸軍軍医部長官となつたと記す。(二)その他、大名の家臣である学生も沢山いたが、彼等も学校を出るとその主人から特別の待遇を受けたとみえる。ポンペは五年間で、約一万三千人の患者(うち小児が二千三百人)を診察、幕府のさらなる滞在要請をことわり、文久二年帰国した。彼が日本の医学生への教育において、(一)学生が一度この職業を決定した以上、全力を尽すべきであり、自分に患者の生命が託されていることを自覚し、その患者に尽し、自分の身体を思うべきではない(二)と医師の心得をのべている。杉田成卿の訳著『医戒』の(一)「医業」は他のために生じて、己のためにせず(二)と同じ西欧の医学倫理思想が教えられたといえよう。見のがすことのできないポンペの功績である。いわばポンペらの教え子が、近代日本建設に有力な人的原動力として活躍することになるのである。以後、ポンペの出身、ユトレヒト陸軍々医学校関係の医師が来日する。しかし軍医ゆえ軍を優先したと判断することは軽率のそしりをまぬがれない。ポンペの後、ボードウィンBaudwin/抱独英が一八六二年十月に長崎へ到着、彼は特に眼科に秀れ、その方面に力

をそそいだが、トラホームの治療に意をとめた。医学教育として、医学と物理・化学の部門（分析研究所）とはこれを分離するという改革を実現した（のち、明治維新になって大阪にできる〈舎密局〉など、その流れの一端である）。また長崎奉行所は、文久二年、〈役医師どもはもちろん、地下のもの（町のもの）にても医業心掛け候ものは悴、二、三男、厄介等に至るまで、十五、六歳より三十五歳までの者、養生所医学所え罷出て（医術）伝習稽古相願候儀不苦候尤出精熟達のものとは同所役掛をも仰付市中開業勝手次第〉と布告している。封建時代を超越した教育の機会均等ともいえる態度である。ポンペについた医学生たちも、もちろん伝習を延長してさらに研鑽をつんだわけである。佐賀藩主、鍋島閑叟もボードウィンに診察治療をうけている。なお、ボードウィンには、A・F・ボードウィンと、A・J・ボードウインの兩名がおり、しばしば混同されるので註記しておく。前者が文久二年（一八六二）来日し、明治三年（一八七〇）に帰国した医師のボードインである。最終的には江戸、大学東校の教師となっている。ポンペ同様にユトレヒトの陸軍軍医学校を卒業し、一等軍医として同大学の教官となっており、日本にくるまで軍医学校教官として約十五年のキャリアをもつ。後者は前者の弟（末弟）で、兄よりはやく安政五年（一八五八）来日し、貿易会社社員で在日オランダ領事を兼ねていた。医書、医療器具、薬、武器、船舶、製鉄所関係器具の販売貿易で利益をあげた。新しい文明器具の紹介と交易という点で、日本に貢献した。明治七年（一八七四）に帰国している。

ボードウインの〈分析窮理所〉の専任として招聘されたのが、K・W・ハラタマ(Gatama (カタタマとも) である。彼もまた日本語に関心をもち、原本の一部を抜粋して『英蘭対訳会話篇』を編集、のち明治元年に『ガラタマ先生口授・英蘭会話篇訳語』として、渡部温（一郎）が『Japanese Conversation / 英蘭会話篇訳語』の書名で出版、これは明治四年に『英吉利会話篇』として出版されている。通俗的な英会話書のはしりである。のちにハラタマは江戸、開成所に迎えられている。ハラタマは、〈衛生という分野の学問が日本の産業的発達にとつとも大なる利益となつた〉

と記し、この方面で日本に大いなる貢献をしている。

長崎の養生所は慶応元年（一八六五）精得館と改称したがボードウィンについては、C・G・ファン・マンズフェルト Mansvelt が来崎、慶応二年（明治四年の間、長崎に在留している。彼もまたユトレヒトの陸軍々医学校出身である。明治維新によって精得館が長崎府医学校と改称されたが、精得館の学頭、長与専齋と相談して、学制を改め、本科である大学科と予科である小学科の二科に分け、前者は医学、後者は物理、化学、数学などを修めるようにした。いわば医師養成の学校を主とし、病院は付属という構成にしたのである。彼は、明治四年、熊本藩の治療所（医学所）に迎えられ、通詞の西慶太郎（直方）と赴任、熊本で養成した学生は百二十名であったが、中に北里柴三郎、浜田玄造、緒方正規（正清）など、医家として知名なものが出現している。さらに明治九年に京都府病院、明治十年大阪病院へ移り、明治十二年に帰国している。

以上のように、近代医学、医学教育もまた長崎が発信地であった。このころの長崎は、ことに東南岸、大浦にできた外人居留地はようやく長崎が小さなヨーロッパの都市らしい観を呈するようになったという。幕末、長崎は内においても外にあつても、もつとも国際的な都市として近代都市へと変貌しつつあつたといつてよからう。ポンペ以後、オランダ医師の指導系譜は、明治二年、A・J・C・ヘルツ Geerts（ゲールツとも）の赴任で終焉する（石田純郎『江戸のオランダ医たち』を参照）。ただし、明治時代にはいっても長崎および東京以外には、オランダから医師の来日を見るようである。明治時代にはいり、やがてドイツ医学が主流となるわけである。ヘルツは、京都、横浜で活躍、特に検疫消毒、薬局方、衛生局の事業に参画して功大であった。明治十六年横浜で四十歳の生涯をとじることとなった。小論はさらに、佐賀藩と英学／沼津学校と明治の教育を留意した。前者ではとくに、来崎の宣教師たちの、佐賀藩の問題にとどまらず、近代教育へのかかわりを考えてみた。後者ははじめにあげた図で示したように、明治の教育

